

## 1.はじめに

皆さんは子ども食堂をご存じだろうか。この調査報告者を読まれている方々の中には、もしかしたら知らない人もいるかもしれない。私が子ども食堂を知ったきっかけは、この成ゼミの調査テーマが子ども食堂についてであったからだ。その時は、子ども食堂についての知識は何一つなく、話を聞いて思ったのは、生活困窮家庭への新しい援助活動ということくらいだった。多分、少し話を聞く程度だと、私と同じ感覚の人が多いのではないだろうか。子ども食堂は、2012年8月に東京都大田区の気まぐれ八百屋だんだんさんが先駆者としてスタートした。店主の近藤博子さんが小学校の校長先生と話す機会があり、「日本は飽食の国と言われているにもかかわらず、お母さんが病気などで朝・晩ご飯にバナナしか食べられない子がいる。」ということを知ってショックを受けたことがきっかけとなり、歯科衛生士と八百屋を続けながらも毎週木曜日に子ども食堂を開いている。だんだんに習って東京都内を中心に子ども食堂が広がり、現在では全国2,200か所以上で活動されている。私たち中京大学現代社会学部の成ゼミでは2017年の春から愛知県内の子ども食堂に学生ボランティアとして活動してきた。そして、実際に子ども食堂の運営者や様々な利用者とかかわり、子ども食堂がどういう場所なのかを実際に見てきた。多くの子ども食堂は貧困に限ることなく、子どもたちや地域の人々の“居場所”として多様な役割を果たしているが、今でも対貧困への活動という面に着目されがちだ。

最初に“居場所”としたのは、子ども食堂が単なる食事提供の場ではないということだ。昭和という一昔前の時代では家族団欒が当たり前だった。食事を共にするという行為は、確かな温かさと幸福感をはぐくみ、家族を一つにする大切な時間が刻まれる。しかし、現代ではライフスタイルの多様化により仕事で帰りが遅くなったり、女性の社会進出や家計を支えるためといった理由で共働きの家庭が増えたり、ひとり親家庭によって一家団欒は難しい世の中になった。それに伴い、「孤食」を取らざるを得ない子どもたちも増えている。孤立しないということは、誰かに気にかけているということだ。逆に言えば、孤食をとる子どもは、食事中に孤立しており、だれにも気にかけていない状態なのだ。こういった状況の子どもたちにとって子ども食堂の“居場所”の意味は大きいのではないだろうか。私はこの調査を通して、子ども食堂が団欒に代わって共食の場を提供し、楽しく温かい食事ができているのか、また家族団欒にはない子ども食堂ならではの良い部分を見つけたいと思う。

## 2.研究方法

本調査では2018年10月から12月の間において子ども食堂運営者、子ども利用者、大人利用者を対象にそれぞれアンケート調査を行った。本稿ではそのアンケート結果をもとに問いを進めていく。以下利用項目。

## ○運営者

- ・Q8 子ども食堂の対象者について当てはまるものを1つお選び下さい。
- ・Q18 子ども食堂の主な活動目的として意識していることはなんですか。下記の各項目について、「とても意識している」から「まったく意識していない」の中から当てはまるもの

を1つお選び下さい。

・Q30 現在、運営にあたり感じている課題は何ですか？

○大人利用者

・Q10 あなたとお子さんとのふだんの生活についてお伺いします。それぞれの項目について、もっとも近いもの一つに○をつけてください。

・Q12 子ども食堂に来る目的として、それぞれの項目について一番近いもの1つに○をつけてください。

○子ども利用者

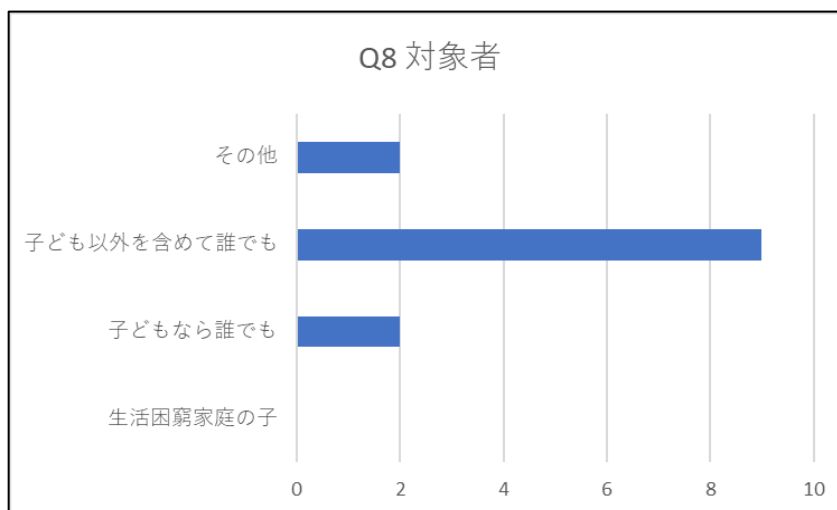
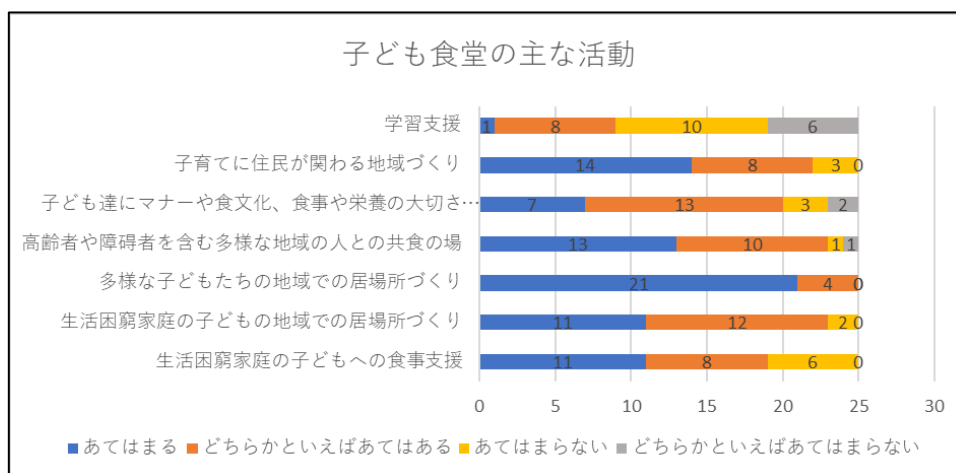
・Q3 子ども食堂の好きなところはどこですか？あてはまるものすべてに○をつけてください。

### 3.仮説

子ども食堂は団欒の場としての機能もしくはそれ以上の居場所としての役割を果たしているのではないか。

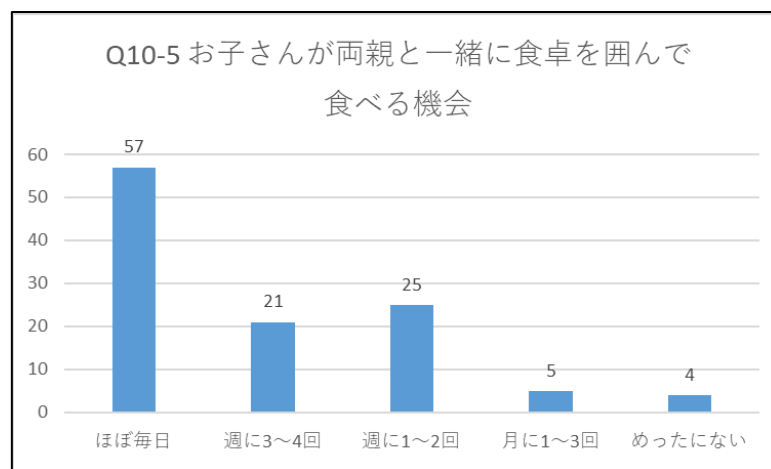
### 4.結果から見る実態

子ども食堂の受け口の広さ



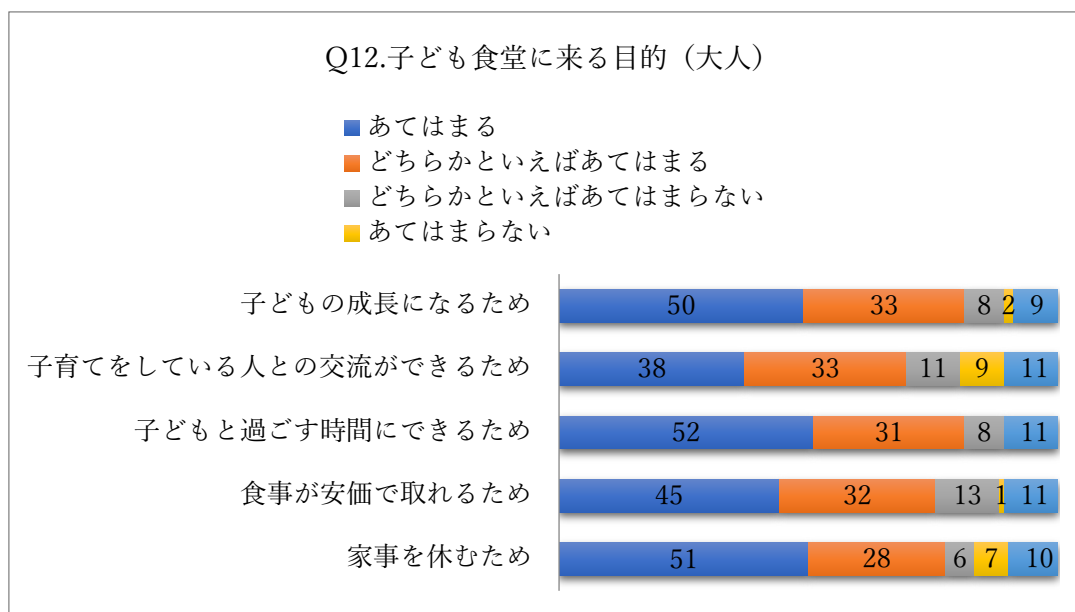
実際に生活困窮家庭のみに向けられた子ども食堂は 0 だった。はじめにでも述べたように、子ども食堂は生活困窮家庭の子どものみに絞らず多種多様な人にとって利用されるような構えをとっている。食事の場で孤立してしまう子どもにとっての居場所になりうる。ただ Q30 の現在運営にあたり感じている課題の項目で本当に必要としている子どもたちにもっと来てほしいという声があった。多くの運営者は、子ども食堂が誰でも利用できる地域の居場所の役割を果たしつつも、子ども食堂という居場所が本当に必要な立場の人に救いの場として利用されることも、活動理念の根底に据えているということだ。

大人の利用者アンケートの Q10 お子さんとの普段の生活に関するアンケートのうち、お子さんと両親が共に食卓を囲む頻度についての項目に着目してみる。

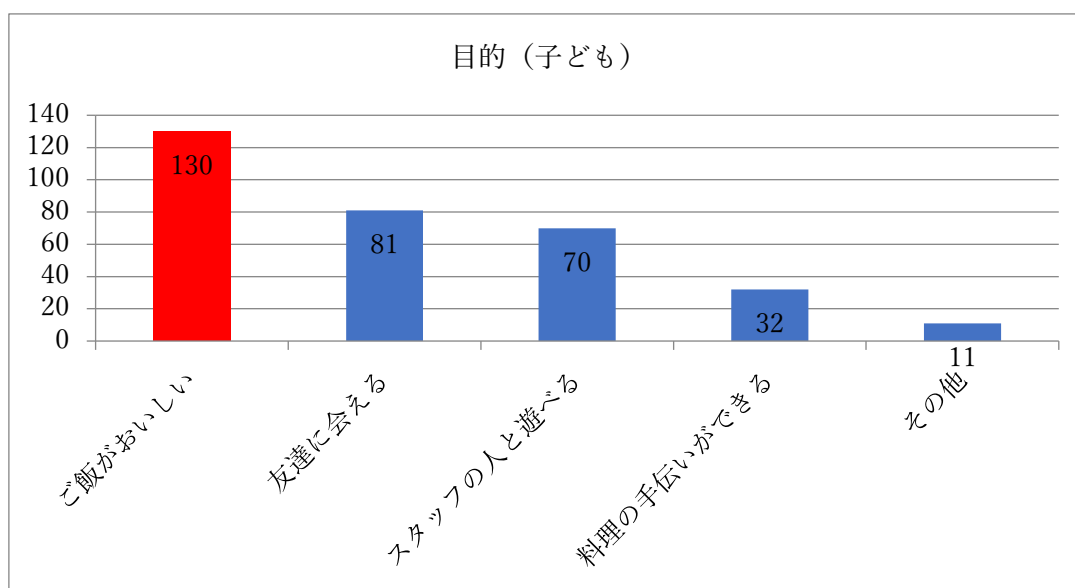


ほぼ毎日と答えた家庭が 57 で全体の約 55%である。次に多いのが週に 1~2 回で 25 (約 24%)、その次に週に 3~4 回で 21 (約 21%) だ。週に 1~2 回の家庭は、おそらく仕事が休日の土日に団欒が可能だということだろう。月に 1~3 やめったにない家庭は合わせても全体の 9%を満たさない。ほとんどの家庭が団欒をできているが、土日に関わらず夜遅くまで働いている家庭や一人親世帯がこの少数であり団欒は困難である。

利用者は子ども食堂をどのような目的で利用しているだろうか。大人と子どもでそれぞれ見てみる。



Q12 の大人が子ども食堂に来る目的の結果だ。このアンケート対象は子ども連れの大人を前提としている。あてはまる・あてはまらないで見たときにどの項目も7~8割強があてはまっている。特に子どもと過ごす時間にできるためではあてはまるが52、どちらかといえばあてはまるが31だ。この結果から大人は子ども食堂を、子どもと食事をする場=団欒の場としても利用しており、また子どもを持つ親同士の交流もここで行われている。ただこのアンケートではどの項目を一番重要としているのか、またその他の目的を記入する欄を設けなかったため他の目的はわからない。しかし、ひとり親世帯の家庭においてもここに来れば安心できる、そういった居場所になっている。



子どもの場合はどうだろうか。まず顕著に多いのはご飯が美味しいという理由である。こ

ここまで居場所としての子ども食堂について見てきたが、当たり前のようにごはんが美味しくない子どもとしてはよろしくない。守山区の心のこどもごはんでは、月2回の開催のうち第三土曜の日にはカレーが固定メニューとなっている。クリスマスにはホールケーキが一家庭に一つプレゼントしている。その他の子ども食堂でも精肉店や八百屋からの寄付で新鮮で美味しい食材が使われている。子どもにとってはご飯の美味しさは最低条件だと伺える。その次に友達に会えるや、スタッフの人と遊べるが多かった。学校や子ども食堂でできた友達と一緒にご飯を食べられることは子どもたちにとっても楽しい時間のはずだ。子どものアンケートの中には先生(子ども食堂の運営者)が大好きで会えるからという回答もあった。

#### 5.おわりに：団欒に代わる居場所となっているのか

調査結果を見てきて、子ども食堂は団欒に代わる居場所としての機能を果たしていると言えるのではないだろうか。ひとり親世帯にとっては、そもそも両親を揃えた団欒は不可能である。また現代では、核家族が増えており、祖母祖父に子どもの面倒を見てもらうという家庭もそう多くない。そういう家庭にとっては単に団らんを可能にするだけでなく、安価で栄養のある食事を調理の手間を省いてとれる時間の節約にもなっている。子どもだけで子ども食堂に来る場合でも、そこに来る友達や運営者、ボランティアの方と交流でき美味しく食事が取れている。親も安心して子ども食堂を利用できているのだと感じた。

この調査を通して感じたことは、アンケートを作成する段階からもっと仮説に沿って調査すべき項目を練り、また作り方も工夫しないといけないと思った。Q12は予め選択項目を絞っており、限られた中でしか選択できないようになっているので、他の回答が得られない。こうなることをもっとよく考えて置くべきだったと思った。また母数をもっと多くすることで結果に目立った違いを見つけられるのではないかと思った。

#### 参考文献

子ども食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～地域との連携で食育の環が広がっています～ 平成30年農林水産省